

## キリストの全き救いに 根差した信仰

コロサイ2章6～19節  
2022年11月20日  
松田 基子 師

今日のキリスト者である私達は、二千年の教会の歴史の上に立っており、そのキリスト教を正しく導いて来た聖書を得ている事は、とても恵まれた時代に生きていると言えます。キリスト教が始まった最初の時代である紀元一世紀において、教会は正しい信仰理解と、信仰生活を指導するために、旧約聖書と使徒達の書簡及び、イエス様が語られた語録を用いました。まだ、新約聖書正典は決まっていなかった。

正典とは、ギリシャ語で、カノンと言いますが、語源は古代エジプトで、物差しに使われた葦の棒からきていて、真っ直ぐな棒と言う意味です。そこから、正典とは、

『これのみがキリスト教教義の基準、  
信仰生活の規範である』

と定めたものです。旧約聖書は、歴史も永く、紀元90年、イスラエルの地中海沿岸のヤムニアに、ユダヤ教のラビ達が集まって、正典結集会議を開きました。そこで、ヘブライ語の聖書39巻を旧約聖書正典としました。しかし当時ギリシャ語圏では翻訳聖書が使われていました。何世代も前から地中海世界に出て行ったユダヤ人の子孫たちは次第にヘブライ語が理解できなくなり、ヘブライ語からギリシャ語に訳したセプチュアギンタ(70人訳聖書)を使っていました。それには39巻以外に、更に色々な書簡が書き加えられていました。後々その部分は外典及び偽典と呼ばれています。

一方、新訳聖書は、紀元130年頃、共観福音書とパウロの10書簡、ヘブライ人への手紙、使徒言行録を正典扱いにしていました。その後、397年のカルタゴ会議に於いて、聖書の目次が決められ、新訳聖書の27巻は今日と同じですが、旧約聖書は外典まで加えられました。教会史の中で、プロテスタント教会の誕生により、

プロテスタント教会は旧約聖書39巻、新約聖書27巻を正典としています。

私達は今日聖書が与えられていることで、物事を聖書で判断する事が出来ます。ただ、それは聖書の字面によるのではなく、祈りつつ聖霊の助けと導きを求めて、

『神様の御心は何処にあるのか』を判断することです。この様に聖書は私達にとって命の言葉になっています。しかし、これまでの道のりは大変なものでした。何が神様の真の御心であり、真理なのか、それはどの様にして見極めるのでしょうか。

テモテ第二の手紙3章16節には、

「**聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です**」

とあります。聖書は決して人間が考えだした知識の産物ではありません。そこには神様が、御自身の御心を教えたいとの願いから、神様の霊が注がれ、霊の働きで成されています。しかし、霊の働きと言うのは、決して魔術的なものではありません。何か機械的に、文言が知らされると言う事ではありません。

『その人の生まれ、育ち、全人格に聖霊が働かれる事によって、**神様の真理を見出させてくださる。**』  
と言う事です。

この事は、パウロとペトロの事を考えると良く分かります。パウロは裕福な家庭に生まれ育ち、外地育ちで、豊かな学識を身に付けた国際人であり、ユダヤ教に精通していました。その彼が、イエス・キリストを信じ、一途になった時、ギリシャ語が堪能な彼は、言葉の壁が無く、地中海世界のどこまでも伝道に行く事が出来、豊かな学識に、神様の霊、神様の光が当てられた事によって、神様の奥義を悟り、それを語り、また、多くの書簡を書いて、教会に回覧させ、御心を伝えることが出来ました。

一方ペトロも、全身全霊、彼も命を献げて、主イエス・キリストを宣べ伝えましたが、彼はガリ

ラヤ湖の漁師出身でしたから、ギリシャ語圏では、通訳を必要とし、ペトロの手紙も、ペトロの信奉者の手で、書かれたとされています。何もパウロとペトロに優劣がある訳ではありません。二人共、神様から与えられた使命を100%全うした大使徒です。霊の働きは決して信じる者を画一化したり、機械的に文言が下ることではありません。多くの人格を通じて語られる。そこに聖書の豊かさがあります。

ところで、問題は初代教会時代、新約聖書正典が確立していなかった時、色々な考えが、教会内をかき回した事です。キリスト信仰とは、

『似て否なる教えが、偽りの教師によって力説されました。』

異端の発生です。異端とは洗礼を受けてキリスト者となり、信仰について、正式な手ほどきを受けた後に、公に定められた信仰の教理を否定することです。ただ、異端者は決して自分の考えが異端であるとは思っていません。

『自分は正しい事を言っている。相手が間違っているから教えてあげるのだ』  
と知っているので、一生懸命になるのです。

今朝の聖書箇所である小アジアのコロサイ教会は、異端の起こりやすい土壌でもありました。コロサイ地方一帯は元々、自然崇拝の地で、月神礼拝や占星術、諸霊崇拝、密儀宗教が入り交じっていて、そこに住む人々は、小さい時からその地の宗教行為の中で育ち、そこで身に着いた信仰感覚が脱げないまま、その上にイエス・キリストを着たために、古い信仰とキリスト教をごちゃまぜにして、

『使徒の教えだけに従ってはいけません。もっとやらなければならない事があるのだ』  
と教えられると、  
『なるほど』  
と思う人も出て来たのです。

教会は当然混乱しました。パウロはそこに、重大な信仰の危機、  
『イエス・キリストのみを救い主とする、そのキリスト信仰が脅かされている』  
ことに危機を感じました。何故そんな言葉惹か

れるのでしょうか。

パウロはコロサイ2章6節で、

「あなたがたは、主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストに結ばれて歩みなさい。キリストに根を下ろして造り上げられ、教えられた通りの信仰をしっかりと守って、あふれるばかりに感謝しなさい」

と命じています。信仰がフラフラするのは、しっかりと結ばれていないからであり、根が無いからヨロヨロするのです。

『主イエス・キリストを信じた。受け入れた。』  
と言う事は、

『自分の好きなサークルに入るように、何回か行って見て、気に入らなかつたら止める。』  
と言う様な軽いものではありません。自分の生も死も、全存在を賭ける決断をしたものであり、また、その価値あるもので、何よりも、そこには神様の働きがあったのです。

イエス様はヨハネ福音書15章16節で、

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」

と言っておられます。その恵と宝を考えるべきです。よそ見をせず、ただキリストにしっかりと結ばれていることです。イエス様は手を差しだしておられるのです。その手に縋りつくのは人間の責任です。キリストに根を降ろし、とあります。植物は根で生きています。そうして成長するのです。

それは、信仰上どんなことかと言いますと、

『使徒から教えられた通りの信仰、それをしっかりと守って、溢れるばかりに感謝する事です。』

イエス・キリストに救われ、信じ従えると言う事は驚くべき恵であり、それが分かれば、感謝に溢れます。一方、偽りの教師が教えていた事が、8節に記されています。パウロはそれを、

「人間の言い伝えに過ぎない哲学、それはむなしいだまし事だ」

と言っています。偽りの教師たちは、

『哲学的に、キリストを知る必要がある』

と言ったようです。彼らにとって、

『キリストは諸霊に並ぶ存在であって、キリスト

だけでは神に到達出来ず、諸霊の助けが必要だ』  
と教えたようです。その事についてパウロは、8節の後半で、  
「それは、世を支配する霊に従っており、キリストに従うものではありません」と言っています。そこで、9節に、  
「キリストの内には、満ちあふれる神聖が、余すところなく、見える形をとって宿っており」と言っています。

パウロは既に1章15節で、  
「御子は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です。天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです」と、イエス様が神様と同質の神の御子であり、神様に等しいお方である事を宣言しています。キリスト者はそのお方を信じ、キリストに結ばれたことによって、10節には、  
「あなたがたは、キリストにおいて満たされているのです」とあります。  
「満たされている」を  
詳訳聖書では、  
「満ち満ちた命になる」と訳されています。救いはイエス・キリストのみによって与えられるのです。何故なら、キリストは諸霊や天使に勝った全ての支配や権威の頭だからです。

偽りの教師は、  
『自分は真の知識を得ている』  
と自認して、  
『これを他のキリスト者に教えなければ』  
と思っていたのですが、  
『割礼の必要』  
も訴えたようです。イエス・キリストによる真の救いに確信がないと、この様に、自分の知る限りの宗教行為をしなければ心が落ち着かないのです。この人の行動に、その迷いは、はっきりと現れていました。しかし、自分ではその事が認められませんでした。

パウロは割礼を強いる偽りの教師に対して、割礼の真の意味を示しました。11節に、  
「あなたがたはキリストにおいて、手によらない割礼、つまり肉の体を脱ぎ捨てるキリストの割礼を受け、洗礼によって、キリストと共に葬られ、また、キリストを死者の中から復活させた神の力を信じて、キリストと共に復活させられたのです」

と言っています。旧約聖書の時代、割礼は神様の民となる契約の徴でした。イスラエルの民は、割礼を受けると共に、神様からの律法を守る事が求められましたが、人類の代表であるイスラエルは、律法を守れませんでした。律法を守る事、良い事をする事では救われない人間のために、イエス様は罪を負って身代わりの十字架に架かって下さいました。神様はイエス様の十字架によって、人類の罪を赦す証明に、イエス様を復活させられ、イエス様によって人類に救いをお与えになりました。この事によって神の民とされる要件は、変わったのです。人はイエス・キリストを信じて、神の子とされることになり、その徴は、洗礼に変わりました。洗礼は新しい、手によらない割礼です。洗礼はただの入会の儀式ではありません。

『キリストと共に十字架に死に、霊の命に復活し、新しく神の子の存在になったのです。』  
この神様の絶大な恵をキリスト者は何故忘れるのでしょうか。キリストにしっかり結ばれ根差していないからです。パウロは惑わされ、迷っているキリスト者に、イエス・キリストが成して下さった命の代価に神様は如何に大きな祝福をキリスト者にお与えになったかを語って、彼らの目を覚まさせています。

13節後半に、  
「神は、わたしたちの一切の罪を赦し、規則によってわたしたちを訴えて不利に陥れていた証書を破棄し、これを十字架に釘付けにして取り除いて下さいました」

と言っています。律法は神様から与えられたものですが、人は誰もそれを完全に守ることが出来ません。結果的には、  
『律法はその人が守れなかった多くの罪を告発する証書を造り、責め立てるものとなった』

のです。ところが、

『神様は、その罪の証書を破棄して、  
十字架と一緒に釘付けにして  
下さったのです。』

もう、不問にして下さるのです。そればかり

ではありません。民間信仰においては、

『諸霊や天使が自分達を支配している』  
と信じられていました。パウロはその様な恐れ  
に対して15節に、

「そして、もろもろの支配と、権威の武装を  
解除し、キリストの勝利の列に従えて、  
公然とさらしものになさいました」

と言っています。

イエス・キリストの復活と昇天は、宇宙を通して  
天に登る、凱旋行進でした。その時、中間にい  
るとされていた天的諸力、諸霊は、捕虜にされ  
たのです。凱旋する王は、捕虜達を引き連れ  
て凱旋行進を行い、本国に辿りつくと国民から  
歓呼を受けていました。パウロはイエス様の復活  
昇天をその様に描いています。この世の勢力  
は、既にキリストの十字架の死によって滅ぼされ  
たのです。ですから何も恐れる必要はありません。

また、律法には、食物規定があり、祭りや新月  
や安息日の規定がありました。

『何故こう言う規定があったのか』  
の説明として、17節に、

「これらは、やがて来るものの影に  
すぎず、実体はキリストにあります」

と言っています。影が見えると言うことは、その  
後には、実態があると言うことです。実態を知  
らせるために、影はあります。過越の祭りの事  
を考えますと、その事が良く分かります。その  
意味を分かろうとせず、影にしがみついで  
いることは愚かなことです。

偽りの教師は、神様に近づくために天使の  
仲保を求めて必至に天使を礼拝していた様で  
す。パウロはその様子を、18節に、

「偽りの謙遜だ」

と言っています。

「こういう人々は、幻で見たことを頼りとし、

肉の思いによって根拠もなく思い上がって  
いるだけで、頭であるキリストにしっかりと  
付いていないのです」

と、独りよがりの信仰を非難しています。

そうならないために、19節に、

「この頭の働きのより、体全体は、節と節、筋  
と筋とによって支えられ、結び合わされ、神に  
育てられて成長してゆくのです」

と勧めています。要はイエス・キリストだけが神  
の御子、唯一の救い主、全被造物の支配者で  
あり、教会はそのお方を頭とする地上の体です。  
ですから、教会はキリストのみにしっかりと繋が  
り、キリストのみに生かされる事によって成長す  
るのです。この原則は二千年経った現在の教  
会も変わることはありません。

私達は聖書に示された、イエス・キリストをさら  
に深く知り、互いをキリストの体の部分部分とし  
て、キリストに救われた絆で結ばれ、共に信仰か  
ら信仰へと成長させて戴きましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

罪深い私達を、イエス・キリストの御救いに招  
き、罪の証書を十字架において破棄し、キリスト  
の体なる教会に連らせて下さり、心から感謝  
致します。正しい信仰に生きるため、聖書をお  
与え下さった事を感謝致します。

聖霊のお導きの下に、更に深く聖書信仰に  
立つ者とならせて下さい。異端に苦しむ方々  
をどうか真理の道へお導き下さい。

尊い救い主、イエス・キリストのお名前によって  
お祈りをいたします。

アーメン。